

Pluricellulatae(Characeae)に属する一種

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-02-28 キーワード: 作成者: 今堀, 宏三, 須賀, 瑛文, Imahori, Kozo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00065360

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

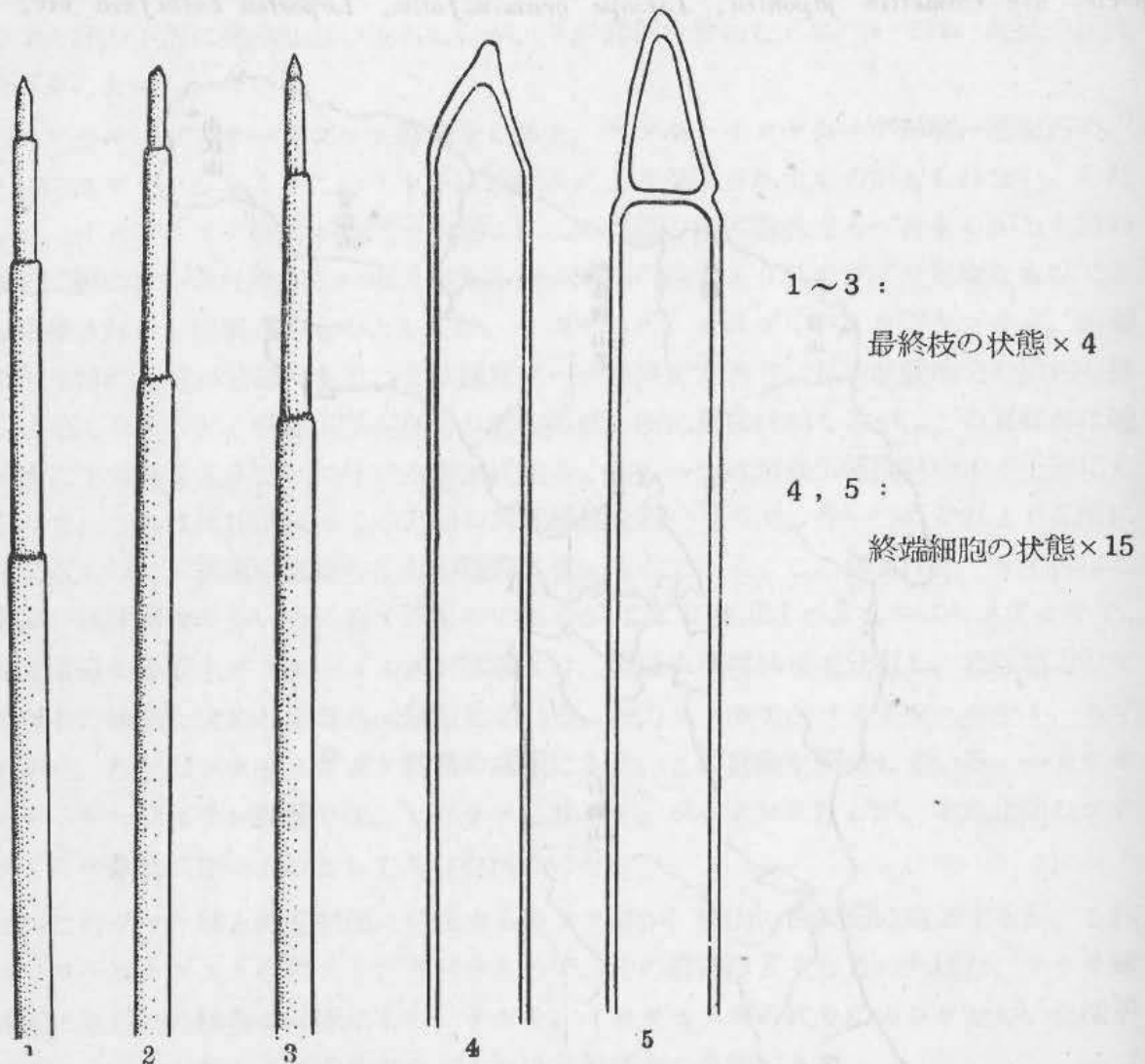


今堀宏三※・須賀瑛文※※

Pluricellulatae (Characeae) に属する一種

Imahori K. & H. Suga; Pluricellulose Species (Characeae) from Japan.

Pluricellulatae は一名 Polyarthrodactylae と呼ばれ *Nitella* フラスモ属の中の Series 列の名称である。フラスモ属においては小枝が又状分枝をくり返しているが、この分枝回数および分枝した最後の枝（これを最終枝 dactyl と呼んでいる）を構成する細胞数等が分類上の大きな特徴となり、これ等によっていくつかの節及び列に分類されている。ところでここにいう Pluricellulatae は字を見ても大体想像出来るが、最終枝の細胞数の最も多い group である。この場合の数は勿論種によってちがっているが、同じ種ないしは同じ個体でも、場所により数に不同がある。しかし最も少ないもので2細胞以上から成っていて、この外に4細胞又はそれ以上の細胞数のものがまじっていれば、この列ということ



※ 金沢大学理学部植物分類学研究室

※※ 愛知学芸大学生物学教室

になる。なおこの列の殆んどの種では終端細胞（最終枝の頂端の細胞）の多くは、他のフラスモ類にみられるような円錐状 conoid でなく、長円筒状ないしソーセージ状 allantoid をなしていることが多いのも特徴と考えられる。

この列に入る種類は全世界で 24 spp. あるが、そのいずれもがそれぞれ固有種であり、かつ日本にはこれまでのところ一種もわかっていない。ところが最近愛知学芸大学の神谷平氏が、*Batrachospermum* カハモズクの採集中にフラスモの一種が繁茂していることを発見せられ、これを著者の 1 人須賀に教えられたので、須賀はこれを採集するとともに更に附近に大群落をなしているところを確認した。この植物は今堀により検討が加えられた結果この列に属する一種であることが明瞭となったが、植物体は性器が未発育の状態にあるため種の決定は出来なかった。しかし上にも述べた如く、これまでわかっている本列のすべてが固有種であることから考え、この植物も又日本固有の新種でないかと想像出来る。しかし詳細は fertile の個体を検討後に改めて報告することとしたい。

なおスエーデンの Horn af Rantzien は、先に本列の全種類について整理検討を加えられたが、この中で邦産の珍種である *N. pulchella* ハデフラスモが取扱われている。この種の終端細胞はすべてソーセージ状をなし、又多くの最終枝が 3 細胞からなっているので、一見本列と見誤られ易いが、最終枝の細胞数に 4 ケ以上のものはなく、又少ないものでは単一の細胞からなるものも散見せられるところから、この種は明らかに *Heterodactylae* に属するもので、このことを附記してここに訂正したい。

とりあえず營養体の記載及び一部挿図をもって新植物を紹介するが、他の殆んどのシャジクモ類が枯死している厳冬の時期にこのような大群落を構成した營養体が発見されたことは興味深い。

Nitella sp.

産地：愛知県、挙母市、土橋（昭和二十九年一月）

環境：水田の傍の小川、水深 30cm、かなり急流で附近にカハモズク生育、FH. [6.2].

營養体：美しい鮮緑色を呈し、高さ 15~20cm に達す。体は全般的にやや細く、茎の直径は漸く 400 μ に達する程度である。茎の節間は小枝全長の約一倍半の長さであり、節部からはそれぞれ小枝を 8 本ずつ輪生している。

不結実枝は通常 2 回、稀に 3 回分枝し、その第 1 分射枝は全小枝の殆んど半ばに達するか、それよりやや短かく、太さ約 240 μ 。第 2 分射枝は 2~5 本ずつ射出し、それぞれから更に第 3 分射枝が 2~3 本ずつ射出している。第 3 分射枝の長さは長短区々であるが、ほぼ第 2 分射枝と等長であり、多くの場合最終枝となっている。最終枝の細胞数は 3~4 からなるものが最も多いが、稀には 2 細胞のものがある。終端細胞は長円錐形ないしソーセージ状を呈し、基部の直径は 40~80 μ で長さは普通 200~600 μ であるが、時には 1800 μ にも達するものが見られる。

結実枝は不結実枝より小さく、2 回分枝してごくろすい寒天質に包まれている。第 1 分射枝は全小枝の約 1/2 の長さか、それよりやや短く、基部の直径約 220 μ である。第 2 分射枝は 5 本で基部の太さは径 180 μ 。第 3 分射枝は 2~3 本ずつ射出し、最終枝となっていて、その細胞数は 3~4 ケである。花期 4 月？。

Résumé

Up to the present time, no species of Pluricellulatae has been found in Japan. Very recently, we collected a specimen of *Nitella* growing in a small river in Kōro-mo City, Aiti Prefecture. As the specimen is sterile, its species name cannot be decided now, but this alga shows the characteristics of Pluricellulatae. As soon as the fertile stage of this plant may be observed, the entire description will be reported in a separate paper.

Nitella sp.

Plants bright green, 15~20cm high. Sterile branchlets 8 in a whorl, generally twice (very rarely thrice) furcate: primary rays almost half the length of entire branchlets: secondary rays 3~5, each of which furcates into 2~3 tertiary rays. Fertile branchlets 8 in a whorl, usually twice furcate and slightly covered with mucus. Dactyls generally 3~4-celled but rarely bicellular: ultimate cells allantoid, 200~600 μ long (rarely up to 1800 μ) and 40~80 μ wide at the base. Oospores mature in March to April.

Bibliography

- Groves, J. 1915: A new *Nitella* — Journ. Bot. 53.
 _____, 1924: Notes on Indian Charophyta — Journ. Linn. Soc., Bot., 46
 _____ & G. O. Allen, 1935: A review of the Queensland Charophyta —
 Proc. Roy. Soc. Queensl. 46.
 _____ & E. Stephens 1933: New and noteworthy African Charophytes 2 —
 Trans. Roy. Soc. Afric. 21.
 Imahori, K. 1948: Miscellaneous papers on the East Asiatic Charophyta 1 —
 Journ. Jap. Bot. 22.
 Kundu, B. C. 1937: A new species of polyarthrodactylous *Nitella* with a review of
 the allied species — Journ. Ind. Bot. Soc. 16.
 Pal, B. P. 1932: Burmese Charophyta — Journ. Linn. Soc., Bot., 49.
 Rantzien, H. H. 1950: Studies in the series Pluricellulatae of *Nitella* with special
 reference to the American species — Meddel. f. Göteb. Bot. Trädg. 18.
 Zaneveld. J. S. 1940: The Charophyta of Malaysia and adjacent countries —
 Blumea 4.

□ 今堀宏三: 日本産輪藻類総説

(pp. 240, pl. 41, 金沢大学理学部植物学教室, 1954年3月, ¥ 1,000)

本書は著者が15年にわたって研究して来た輪藻類をまとめたもの。前後篇からなり、前篇では研究史、地理学的分布、季節的消長、生態的要因、系統的位置ならびに分類法等を和英両文で記し、後篇では本邦全輪藻類の検索表にはじまり各種の記載、地理的分布、生態的還境、産地等について述べている。尚巻尾には本植物の研究に必要なあらゆる術語を和英、英和対訳のもとに解説してあって本書の理解を助けている。(里見信生)